

演題：日本学術会議会長の談話をめぐって

演者：阿岸鉄三（東京女子医科大学名誉教授）

「ホメオパシー」についての会長談話 (1)

ホメオパシーはドイツ人医師ハーネマン(1755 - 1843年)が始めたもので、レメディー(治療薬)と呼ばれる「ある種の水」を含ませた砂糖玉があらゆる病気を治療できると称するものです。近代的な医薬品や安全な外科手術が開発される以前の、民間医療や伝統医療しかなかった時代に欧米各国において「副作用がない治療法」として広がったのですが、米国では1910年のフレクスナー報告に基づいて黎明期にあった西欧医学を基本に据え、科学的な事実を重視する医療改革を行う中で医学教育からホメオパシーを排除し、現在の質の高い医療が実現しました。

こうした過去の歴史を知ってか知らずか、最近の日本ではこれまでほとんど表に出ることがなかったホメオパシーが医療関係者の間で急速に広がり、ホメオパシー施療者養成学校までができています。このことに対しては強い戸惑いを感じざるを得ません。

その理由は「**科学の無視**」です。レメディーとは、植物、動物組織、鉱物などを水で100倍希釈してする作業を10数回から30回程度繰り返して作った水を、砂糖玉に浸み込ませたものです。希釈操作を30回繰り返した場合、もともと存在した物質の濃度は10の60乗倍希釈されることとなります。こんな極端な希釈を行えば、**水の中に元の物質が含まれない**ことは誰もが理解できることです。「ただの水」ですから「副作用がない」ことはもちろんですが、治療効果もあるはずがありません。

物質が存在しないのに治療効果があると称することの矛盾に対しては、「水が、かつて物質が存在したという記憶を持っているため」と説明しています。当然ながらこの主張には**科学的な根拠がなく、荒唐無稽**としか言いようがありません。

過去には「ホメオパシーに治療効果がある」と主張する論文が出されたことがあります。しかし、その後の検証によりこれらの論文は誤りで、その効果はプラセボ(偽薬)と同じ、すなわち心理的な効果であり、治療としての有効性がないことが科学的に証明されています¹。英国下院科学技術委員会も同様に徹底した検証の結果ホメオパシーの治療効果を否定しています²。

「幼児や動物にも効くのがだからプラセボではない」という主張もありますが、効果を判定するのは人間であり、「効くはずだ」という先入観が判断を誤らせてプラセボ効果を生み出します。「プラセボであっても効くのがだから治療になる」とも主張されていますが、ホメオパシーに頼ることによって、確実に有効な治療を受ける機会を逸する可能性があることが大きな問題であり、時には命にかかわる事態も起こりかねません³。こうした理由で、例えプラセボとしても、医療関係者がホメオパシーを治療に使用することは認められません。

ホメオパシーは現在もヨーロッパを始め多くの国に広がっています。これらの国ではホメオパ
「1 Shang A et al. Are the clinical effects of homoeopathy placebo effects? Comparative study of placebo-controlled trials of homoeopathy and allopathy. Lancet 2005; 366: 726

2 Evidence Check 2: Homeopathy 2010. 2.8

<http://www.publications.parliament.uk/pa/cm200910/cmselect/cmsctech/45/45.pdf>

3 ビタミンKの代わりにレメディーを与えられた生後2ヶ月の女児が昨年10月に死亡し、これを投与した助産婦を母親が提訴したことが本年7月に報道されました」

シーが**非科学的である**ことを知りつつ、多くの人が信じているために、直ちにこれを医療現場から排除し、あるいは医療保険の適用を解除することが困難な状況にあります⁴。またホメオパシーを一旦排除した米国でも、自然回帰志向の中で再びこれを信じる人が増えているようです。

4 WHO

日本ではホメオパシーを信じる人はそれほど多くないのですが、今のうちに医療・歯科医療・獣医療現場からこれを排除する努力が行われなければ「自然に近い安全で有効な治療」という誤解が広がり、欧米と同様の深刻な事態に陥ることが懸念されます。そしてすべての関係者はホメオパシーのような**非科学を排除して**正しい科学を広める役割を果たさなくてはなりません。最後にもう一度申しますが、ホメオパシーの治療効果は**科学的に明確に否定**されています。それを「効果がある」と称して治療に使用することは厳に慎むべき行為です。このことを多くの方にぜひご理解いただきたいと思えます⁵。

平成22年8月24日 日本学術会議会長 金澤 一郎

ホメオパシーに関する金澤 一郎日本学会議会議長 (平成22年8月24日)の談話の問題点(1)

談話:

科学の無視

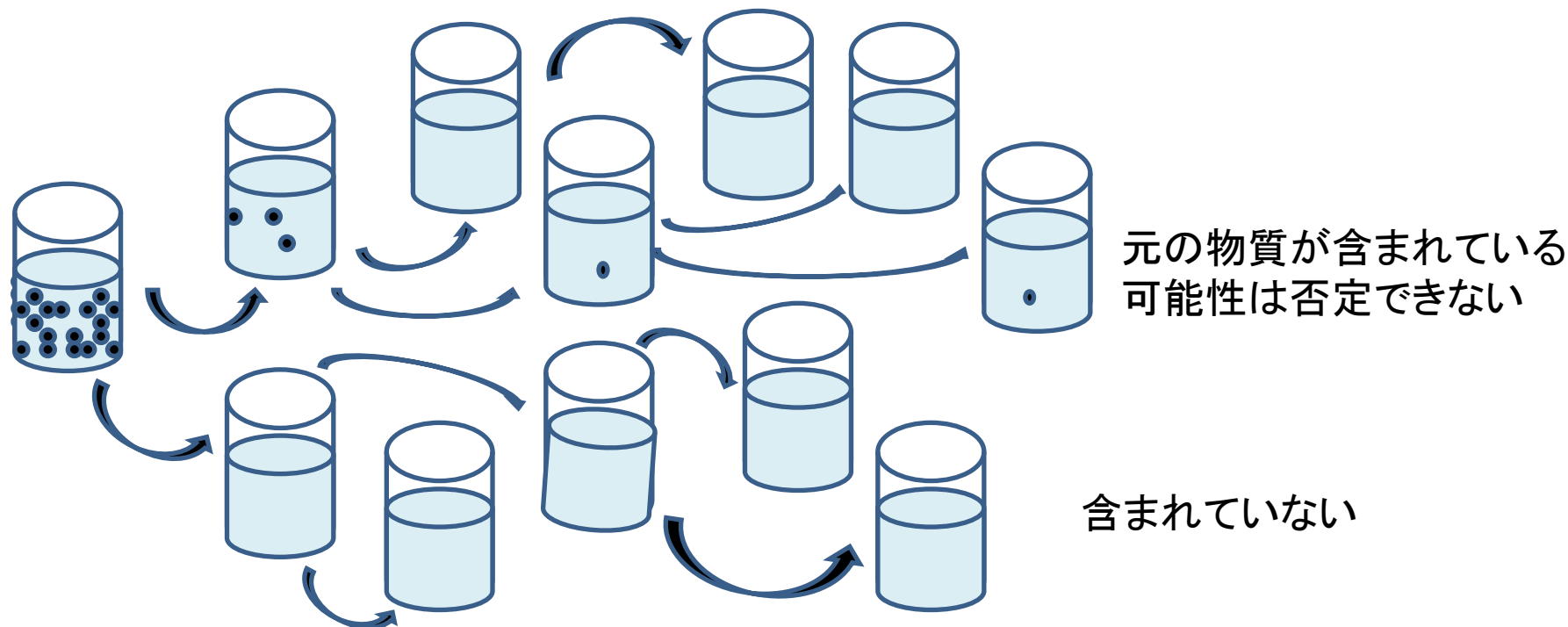
100倍希釈を30回繰り返すと 10^6 の希釈となり、元の物質は含まれない

見解(阿岸鉄三):

すべての希釈液に含まれないは、科学的に誤り

単数、あるいは複数の希釈液のなかに含まれている可能性を否定できない

当代の科学技術では、検出できない可能性がある



ホメオパシーに関する金澤 一郎日本学会議会議長 (平成22年8月24日)の談話の問題点(2)

談話: 科学の無視 科学的な根拠がなく、荒唐無稽

見解(阿岸鉄三):

仮に、元の物質が含まれていないとして、溶媒に、元の物質と一緒にあったなんらかの情報が記憶・瑕疵として残る可能性はないか？

現代の科学技術では、検知できないような。。。

例えば、重水素が発見される前は、水は H_2O だけだった。

Wikipedia: **重水素**(じゅうすいそ、deuterium(デューテリウム))は**水素**の安定**同位体**の1つ。元素記号は 2H で表し、略号としてDやdで表記されることも多い。例えば重水の分子式は D_2O と表記される。**三重水素**との区別のために**二重水素**と呼ばれる事もある。水素原子の**原子核**が**陽子**1つなのに対して、重水素原子核(重陽子)は陽子1つと**中性子**1つから構成される。

見解(阿岸鉄三): 現代科学で理解できない、すなわち、現代科学的には非科学的なところに、真理のある可能性を否定するのは、科学的態度ではない。科学は進歩する。“今日の非科学的”は、“明日の科学的”かも知れない。医療奇跡が、通常医療になったのを、われわれは見てきた立会人である。**真理は、科学の進歩と別のところに存在する。**

ホメオパシーに関する金澤 一郎日本学会議会議長 (平成22年8月24日)の談話の問題点(3)

談話: 科学の無視 科学的な根拠がなく、荒唐無稽

見解(阿岸鉄三):

今日、医学・医療を科学だけで理解するのは適切でない。医学・医療を科学だけで理解する考えは、すでに破綻している。

例えば、

1. 医学・医療に密接に関係する**生命(いのち)**は、科学の対象ではなく、宗教・哲学などの問題である。
2. **WHO**特別委員会は、1998年に、憲章の健康定義に、“身体的・精神的・spiritual・社会的“の文言を加えるべきと提言。時代の思潮に沿うものと評価されている。Spiritualityは、今日、科学的であり得ない。
3. 日本国厚生労働省は、EBMといいながら、**人道的見地**からOrphan drugを保険医療で認めている。

都合のいいときだけ**科学的と拾い**、

訳が分からなくなると**非科学的と捨てる**。

ホメオパシーに関する金澤 一郎日本学会議会議長 (平成22年8月24日)の談話の問題点(4)

見解(阿岸鉄三):

科学至上主義は、過去の遺物となった現実に
科学者は気づくべきである。

例えば、

1. BSE(bovine sponge encephalopathy狂牛病)牛肉輸入再開
では、科学的より政治的判断
2. 科学と宗教の統合
3. 量的研究と質的研究の統合
4. 統合医療-科学的医療と非科学的医療の統合-

統合知Integrative Intelligenceの創生

ホメオパシーに関する金澤 一郎日本学会議会議長 (平成22年8月24日)の談話の問題点(5)

見解(阿岸鉄三):

ホメオパシーの本質に関する問題と

運用・利用における問題とを混同

助産師のことは、運用・利用の問題

通常医療では、運用・利用(ex.処方・手術)に誤りがあっても、

それ自体は否定される訳ではない

かつて、「科学」は万能であり、すべてに「科学的」であることが目指された。<輝かしい未来><客観的な正しさ> 「真理」の象徴であったが、変容した。

1. 代表の物理学は繰り返し可能性・客観性⇨時間の流れは不可逆的 ex) 生命・環境
2. 世界の予知・支配・制御の世界観⇨カオス・複雑系(遠い将来は予測不可能)。「無知の知」へ ex) 天気予報・株価変動
3. 科学→技術の構造⇨テクノロジー→理論 ex) 遺伝子研究・ゲノム解析・携帯電話
4. 科学を旗印とするマルクス主義の衰退。

時代は、「科学」単一原理主義から、宗教・経済・民族・テクノロジー、原始的/最先端など様々な要素が複雑に絡み合う様相へ。(黒崎政男:朝日新聞2002年6月19日、夕刊、2版、13頁)



種かしく豊かなイメージ
1980年代に振られたキネ
ブリック監製の『2001年宇宙
の旅』。そこで描かれた未来像は
決して楽観的なものではなかった
にせよ、科学技術は、人類を次の

科学をよむ

ゆらぐ科学のリアリティー

崩壊した「正しさ」の象徴



黒崎 政男
東京女子大教授
(哲学)

かつて、「科学」は万能であり、あらゆるものが「科学的」であることが目指された。同じころ、手塚治虫の鉄腕アトムは「心臓に科学の子として入った」と夢を語った。公害の発生など、すでに科学技術でカガティフな側面が暗示されていたとはいえない。基本的「科学」は、人類を豊かにしてくれるものであり、それこそが「正しさ」の象徴であった。科学の存在としてあった公言

世紀に新たなステージに進化する学たるゆえの客観性を形作ってきた。しかし、時代の関は「生命」「環境」へと推移する。ここでは、時間の流れは不可逆的(「進化的問題」ではの点回りの「進化的問題」ではの点)はとも異なるものがあり、従来の繰り返し表現(「まじ」)に、根本にある法則がわか

能あり、せいぜいコンピュータ上のシミュレーションでの予想として扱うしかない。個別性や回性を特徴とする「生命」や、複雑な要素が絡む環境は、単純要素と法則の発見(「無知の知」といふ深い段階)に進むたとも言えが、いずれにせよ、<世界の完全予知支配>と制御(という虚構な世界観は大

きく崩れたと言え。第三に、科学技術という構造物の、理論的なあり方から、ノロイが従って多い(隣接関係)に遭遇する。時代は、「科学」といふ単一の原理に導かれるのではなく、宗教や経済や民族やテクノロジー、あるいは、原始的なものや最先端のものや、さまざまな要素が解ほくはせはば、複雑な絡み合相のうちに進むことになるのだ。

また第二に、長い「科学」を代表してきた物理学は、繰り返して実験の可能、追認可能を大きな特徴としてきた。ここでは(時間)は高度でも実験で繰り返すことのできるものであり、この(繰り返)は望めざるも、地球温暖化の問題は、繰り返して実験が不可

は、地球温暖化と環境ホロカソをはじめとする地球環境問題として、地球や人類そのものの存在を脅かすまでになった。

繰り返して実験が不可能に
ながいまや、二酸化炭素も有害物質をこれ以外に出さず、この(繰り返)以外の解決を科学が提示する(繰り返)は望めざるも、地球温暖化の問題は、繰り返して実験が不可

は、その現象は完全な予知と支配(制御)のもとに入るといふ物理学世界観そのものが崩れはじめた。1970年から始まるオース・複雑系研究によつて「ある時」点で状態が決まれば、その後の状態原理的にすべて決定されていくにもかかわらず、遠い将来の状態が予測不可能である(繰り返)ことが明らかになる。水の流の、イヴェンション(な)はあり得なくなった。ところが、黒崎

近代科学の信頼喪失

近年は世俗的ヒューマニズムの妥当性・有効性が疑われるようになって。。。1つの理由は、その担い手である近代エリートの権威を支えていた**近代科学の威信が揺らい**できていること。。。1970年ごろから多くの困難な問題を生み出してきた。。。資源・環境・人口問題など。。。科学的知識・テクノロジーを駆使した武器により、大量・短時間内の殺人。。。科学者は世界観的には空白な存在であり、精神や思想に関わるリーダーなどではあり得ないという常識。。。一方、世俗的エリートを支えてきた**人文的教養の権威も後退**。。。哲学・倫理学・疫学・宗教w・文学・歴史学など。。。

(025-011)

科学は、約束事

科学というものは、科学者社会によって承認され、社会もまたそれを真に受けている**約束事**だが、真理であるかどうかは分からない。その意味で、科学はある程度先進国の普通の教育を受けた人が信じている文化と伝統のようなもので、いつ**恣意的に変わる**か分からない。

(池田清彦: さよならダーウィニズム。講談社選書メチエ120, p231, 講談社, 東京, 1997)

(026-034)

科学主義は、狭隘な哲学的立場

- 伝統的な自然科学の方法は、物質的現象の研究においては精密で簡潔で有効であるが、その一方で、人間に関する諸事の研究においてはしばしば不適切で、無効で、還元主義的で、また有害である。人間を研究するためには他の方法—現象学的・民族誌学的・歴史的・文学的・物語的・理論的・解釈学的方法—が、伝統的な科学的方法によって捉え、そして扱うことができない、微妙で精妙な人間的現象のための捕蝶網の役割を果たさなければならない。**科学は知の探求**である。他方、**科学主義は**自然科学の方法が全ての研究調査活動に用いられるべきであるとする、**狭隘な哲学的立場**である。

- (Elkins, ND : Beyond Religion,1998

- (大野純一訳:スピリチュアル・レボリューション、p264、星雲社、東京、2000年)

も、政治判断の時期は近づきつつあるとの見方は強まっている。政府は近く全頭検査の見直しを食品安全委員会に諮問し、早ければ月内にも答申を得るとともに、日米局長級協議の再開を検討する方針だ。

牛海綿状脳症（BSE）問題で止まっている米産牛肉の輸入再開問題が大詰めを迎えつつある。9月21日の日米首脳会談で、ブッシュ大統領は小泉首相に再開に向けた「政治的決断」を迫った。この時は拒んだものの、日本側で

牛肉の輸入再開問題、大詰め

「政治決断」迫った米

小泉首相「輸入再開は科学的に判断する」
ブッシュ大統領「信頼や学識に任せられるものではない。科学的な問題も大事だが、政治的な決断も必要だ」

ニューヨークのホテルで行われた日米首脳会談で、大統領は首相に政治的リーダーシップの発揮を迫った。11月の大統領選を控え、オハイオ、ウイソコンシン州州長選挙の激戦区の番町をめぐり、この思惑があった。しかし首相の態度は変わらなかった。会談前に調整した「この問題は科学的に判断する。米政府は政治決断を求めるだろうが、日本政府としては応じない」との政府方針に沿った対応だった。

会談後、首相同士の間では公明にせず、両政府は「両首脳は、できるだけ早期に牛肉貿易を再開する重要性で一致。再開にかかわる具体的な事項について、両政府が速

やかに協議を行うことを確認した」との合意事項を発表することになった。会談直前まで日本国内の調整は難航した。原因のひとつは、外務省が甘い見通しを米側に伝えたことだった。複数の関係者によると、外務省幹部

はホワイトハウス高官に「20カ月齢以下の除外で政治決断は可能」と伝えていた。大統領が会談直前の9月10日、オハイオ州で「市場を再び開くよう日本を説得することはいわゆる日本の利益になる」と発言したのも、こうした見

通しを踏まえたものだ。外務省は首相官邸に「米政府は強硬だ。なんとしても今回の会談で政治決断をつけよう」という旨を伝えた。実際、ライス米大統領補佐官は会談前に何度も福田官房長官に電話を入れ、「全頭検査という、世界中でほとんど日本だけと言ってもいい方法に合わせるのが良いのか」と迫った。

局長級協議にらみ調整

一方、農水省や厚生労働省は「国内手続きが終わっていない。今回は絶対に無理だ」と主張していた。

局長級協議にらみ調整。政府高官は「日本の全頭検査が国際基準にならないのは明らか。科学的根拠がそろった上で、決断しなければならぬ時は来る」と語る。

政府は12月召集予定の臨時国会の前に、食品安全委員会へ諮問し、見直しを認める答申を得た後、農水、厚生両省が「20カ月齢以下の牛を検査から除外する」という作業が必要だ。

首相官邸は結局、農水、厚生両省の意見を採用し、「食の安全」へのこだわりが強い小泉首相も了承した。

政府関係者は、対米関係よりも国内世論を優先させた判断の背景を解説する。「首相は年金、多国籍軍参加で説明不足が問われた。BSEでも世論が反発したら、政権の足元が揺らぎかねない」

また、日本政府内でも輸入再開を決定する時期が迫っている、この見方は共通認識になりつつあった。そんな

牛肉輸入問題を巡る日米両政府の動き



- 03年 12月23日 米農務長官がBSE感染牛の存在を発表
- 24日 日本政府が米国からの牛肉の輸入停止を決定
- 04年 1月23日 日米両政府の代表者協議で、米側は日本の全頭検査を批判
- 4月24日 日米両政府が「夏をめどに結論を出せるよう努力」で合意
- 9月 9日 日本政府の食品安全委員会が「20カ月齢以下の感染牛を検出するのは困難」との報告書をもとめる
- 9月21日 ニューヨークで日米首脳会談

科学的判断の脆弱性

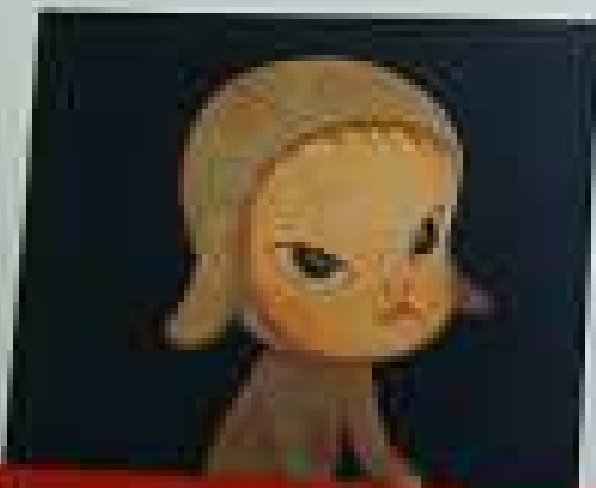
013-040

(朝日新聞2004年10月14版3頁)

現代では、科学的判断は、絶対的ではない。政治的決断に負ける。

越境する知 2 語りつむぎだす

野矢将一編著 一橋大学文化研究所 編

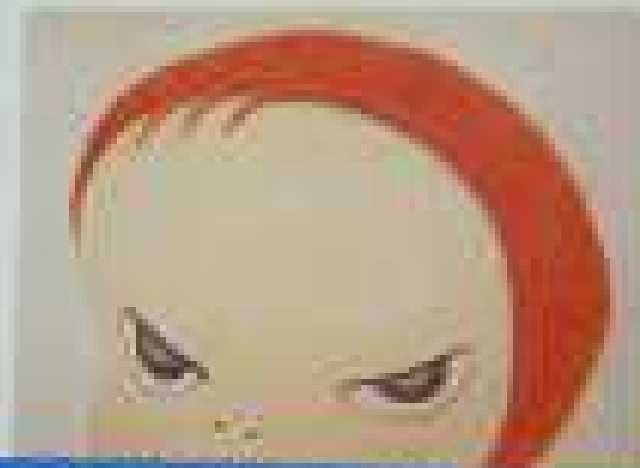


知の言葉が立ちあがる
場所への問い

国境を越え、文化を越え、言葉と身体が交差する。野矢将一編著、一橋大学文化研究所編。知の言葉が立ちあがる場所への問い。

越境する知 5 文化の市場: 交通する

野矢将一編著 一橋大学文化研究所 編



知を消費する 身体が交通する

私たちが生活する世界は、知を消費する身体が交通する。国境、文化、身体、言葉、知の市場が交差する。野矢将一編著、一橋大学文化研究所編。知を消費する身体が交通する。

一橋大学出版部

知の越境

- 知の越境とは、学問分野の越境であるだけでなく、文化や芸術の境界の越境であり、国と国との境界の越境であり、階級・人種・性・世代の境界の越境であり、精神と身体の越境であり、言葉と権力が作動するあらゆる境界の越境を意味。。。私たちは、知の越境を、ポストモダンの哲学のように越境的な思考や、場と身体を持たない思考によって遂行しているのではない。一人ひとりが当事者として生の現場に参入し、受苦し引き裂かれる身体の狭間のざわめき鼓動する知を、ダイアローグの言語によって掬い上げる実践を試みている。国家や家族や企業や市場や学校や大学という装置に**体制化された近代の知の編成を内側から突き崩す挑戦**。。。。

- ref： 統合知は、知の越境

- (栗原彬ら：越境する知への誘い。

- 越境する知2、語り：つむぎだす(栗原彬ら編)。Pi、東京大学出版会、東京、2000)

WHO憲章改定考察への要求

1998年1月22日WHO憲章のレビュー：特別委員会報告

以下を挿入する

「健康とは、完全な肉体的、精神的、**spiritual**および社会的福祉のdynamicな状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない

Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity」

(津谷喜一郎ら：、健康のスピリチュアル・ディメンジョン(5)、東洋医学28(3):234, 2000)

(027-055) WHOにおける健康定義に スピリチュアリティ書き加え提案の背景

- 1. **スピリチュアリティ**を重視する立場も、慎重あるいは反対の立場も当然ありうる。
- 2. 背景として、**QOL**の様々な側面が問題とされるようになった状況がある。
- 3. WHOは**宗教的な祈禱**による治療や民間療法などをも**軽視・排除しない**。
- 4. social/physical/psychological/cultural/spiritualなどの形容詞を**同列に列挙する**ことで健康を総体的にとらえている。
- 5. 1984年の第37回総会ですでに決議前文では、**スピリチュアルな側面**について言及されている。

(葛西賢太:スピリチュアリティを使う人々。スピリチュアリティの現在
(湯浅泰雄監修)、p145、人文書院、京都、2003年)

(028-066)

変則的な事例の観察

- すべての偉大な科学はある**ジレンマに直面**することから始まっている。ジレンマとは、その時々^の知に疑問を投げかける変則的な事例が観察されること、現行の世界観とは相いれない出来事が厳として存在すること、あるいは現在の知識では解決できない問題があることなど。それらの変則的な事象が観察されるときに取りうる2つの選択肢。1) 現在の世界観に同化する方法, 2) 新しい情報を取り入れて**世界観自体を変化させる**方法。後者は大きな社会運動を生みだす種となってきたが、「変則的事例」であると認識されるには、ある程度の頻度や説得力が必要。。。人は見ることを期待していないものは文字通り目に入らない。注意が向けられなければ意識的な知覚は成立しない。
- Ref : 気づき alertness, awareness ← 啓発・啓蒙
- 合意的トランス (Charles Tart)からの脱出 ← 直観
- (カサンドラ・ヴィーテン、ティナ・アモロック、マリリン・シュリッツ: 一つの山に通じる多くの道。
スピリチュアリティといのちの未来、島藺進ら監。p283, 人文書院、京都、2007年)